

日本のモダニズム建築を訪ねる

——知られざる名建築をもとめて——（全 10 回）

第3回 上野の森の学び舎： 東京藝術大学美術学部キャンパス

平井 充（建築家）

歴史と文化を発信し続ける上野の森

上野公園は、正式名称を上野恩賜公園といい、明治6年に政府の太政官布告によって日本で最初の公園に指定されたものである。もともとこの場所は、江戸時代から寛永寺を中心とした子院などが密集していた。幕末の彰義隊が立て籠った上野戦争により焦土と化したのち、ボードウィンという蘭医が医学校を建設するために訪れた際、この上野の景勝を賞讃して、公園とするように働きかけたことがきっかけとなる。このように上野公園は、西洋の目によって発見され、日本人の手によってつくられたものなのである。

そして明治22年に、東京芸術大学の前身である東京美術学校が、その公園の片隅に開校した。開校満二十五年記念式典のとき、当時校長だった正木直彦による以下の話が残っている。



絵画棟石膏室（写真：小倉 覚）

「仏国美術学院へ行かれて見るに、其地は市街の中であるが、小高き処で、河に臨み林を控えといふゆうやうに、洵に幽邃で風致のある、一頭地を抜いて居る処であったのに男爵（創設時の校長代理であった浜尾新）が感ぜられ、成るほど美術学校はかういふ処でなければならぬと考えられて」^{*1}

ここから芸大が上野に設置された理由がうかがわれる。このように、美術を学ぶにはそれに相応しい環境のなかでなければならぬという意図のもとに、この学校は開校したのである。

このモダニズム建築の作者は誰か

国立博物館正門前に立って、目の前にある道路から谷中方面を望めば、樹木の間から顔を出した、一際高いコンクリートの建物が遠くにみえる。ここに芸大のキャンパスがある。公園の中心から離れたところにキャンパスの正門があるため、目的がなければ訪れる機会もほとんどないだろう。

芸大の建築は、華やかな建築が多い上野公園の中にありながら、今まで語られることは少なかった。じつは、この緑が覆うキャンパスのなかに興味深いモダニズム建築が隠れている。それは図書館・美術品収蔵庫（1964）、絵画棟（1968）、彫刻棟（1971）という3つの建物だ。これらは建てられた時期が異なるが、一つのマスタープランにもとづいてつくられており、今でも美術学部キャンパスの骨格を形成している。

その端正なプロポーションをもつ建築群を、マスタープランからデザインしたのが天野太郎という建築家である。

じつは昨年、「天野太郎の建築展」という展覧会がこの芸大で行われた。私も実行委員をしていた関係で、何度もここに訪れることになったのだが、小さいながらとても自然豊かで良い環境だと感心した記憶がある。

天野は、大正7年に広島県呉市に生まれた。終戦の年に、早稲田大学建築学科を卒業して鹿島建設に勤務する。その後、工学院大学、東京芸術大学で教鞭をとった。鹿島建設時代に、天野はアメリカの建築家フランク・ロイド・ライトのところへ留学している。彼は、影響力の強かったライトの薫陶を受けた日本人の中でも、師の模倣に終わらなかった数少ない建築家であった。彼の代表作を辿ってみると、「音羽の家（1955）」と「新花屋敷ゴルフクラブ（1959）」のようにライトの影響が感じられる初期の作品から、「武蔵嵐山カントリークラブ（1961）」、「親子の家（1962）」などのように天野らしい作風への変化を追うことができる。

この芸大のプロジェクトは、そのような作品を発表し終えて、年齢的にも円熟した時期のものであった。また、天野が40代後半から発症したパーキンソン病によって、60歳になる頃に仕事ができなくなったことを考えれば、これが彼の集大成でもあったのである。

守られた自然

竣工時、時代は高度経済成長の真ただ中であった。古いものより新しいものを、そして時代を象徴する新たなデザインにと、多くの建築家は疑いの余地なく取り組んでいた。彼らが環境に対する意識よりも、猛スピードで発展していく経済を優先させた結果、公害問題も深刻なものとなっていった。

この頃、1970年の大阪万博を頂点とするように、これからの都市を発展させるべく、文明の象徴のような都市計画の提案が次々と発表されるようになる。そんな中で、天野が上野の森という豊かな環境とそこにある歴史性を大切にしていたことは特筆すべきことである。美術を学ぶ情操を養うためには環境こそ大切であるという天野の考えは、芸大における開校の精神とも重なっていた。

さて、ではこの計画はどのように進められたのだろうか。

天野はまず、歴史と文化を抱えたこの広大な上野の森に注目し、そのような公園の中にキャンパスがあるという印象を壊さないことを基本方針として据えた。この敷地の中心には、天野が“小さな原生林”とあって愛した林がある。そこには、芸大の創設者である岡倉天心のお堂と、古くから残る小径がひっそりと佇んでいる。天野は、ひと気のないこの道を歩くのが好きだった。そして、キャンパスの全体計画では、その“小さな原生林”を中心に残しつつ、周辺に隣接している動物園や谷中方面の気配を呼び込み、既にあった護国院と東京府立美術館（設計：岡田信一郎）がアイストップとなるように、新しい建物を配置して周囲の環境と連続性を図った。警備上の問題から実現にはいたっていないが、アイストップとなっていた府立美術館がなくなったあと、そこからキャンパスのアプローチを導く計画も存在していたという。



小さな原生林



彫刻棟（左）と絵画棟（右）の間から護国院をみる



こうして生まれた建築群によって、この小さな原生林は、息苦しさを免れ、周りの環境と手を結び合い、いきいきとしたものとなっている。この計画では、むしろ建築ではなく、そこにある自然や環境が優先されていることが興味深い。いまあるものを洞察しつつ、そこにある可能性を読み取って新しいものを考えていく姿勢は、まさに現代に求められていることといえよう。

敷地に教わる建築

それぞれの建物をみてみよう。いずれも幾何学的な構成にもとづく非装飾で打放しコンクリート仕上げのモダニズム建築である。それまでの天野の作品には、必ずタイル貼りや白い塗装が施されており、ここまでシンプルな打放しコンクリートの作品はみられない。これは、天野によるとサッシュとコンクリートの予算しかなかったという厳しい条件の中で設計したからだという。

図書館・美術品収蔵庫では、昭和初期に建設された陳列館（設計：岡田信一郎）と正木記念館（設計：金澤庸治）というデザインの異なる2つの建物に、書庫と収蔵庫のような閉鎖したヴォリュームが、軒や壁面を揃えて寄り添うようにそれぞれ配置され、あらたなヴォリュームの存在感がうまく抑えられている。天野は、それらを視線が抜ける渡り廊下でつなぐことで、既存の建物と連

携させた中庭をつくりだした。また、図書館の内部空間は、大きな開口部と天井を内外連続させることで、周囲の森を内部まで引き込んだような開放的で落ち着いた空間をつくりだしている。ここに天野が、敷地に教わり周辺の状態を読み取りながら、その対象とするもののポテンシャルを高めていくという姿勢がよく表れている。



図書館の中庭：左が正木記念館、右に芸大附属図書館

次に、図書館を背にして近年建設された大学美術館（設計：六角鬼丈）脇を通りぬけると、絵画棟が緑の間からやや角度の振れた配置で現れる。絵画棟は、この辺で最も高く、国立博物館正門前からみえるのがこの建物である。ここでは、上野の森の面積を最大限に残すために階を上部へ積み上げている。天野は、樹木の高さから突出することになったこの高層建築にあたる直射日光をブリーズソレイユ^{※2}によってやわらげた。これにより建物の彫りを深くし、多様な表情をもつ陰影をつくりだすことに成功している。今は取り払われてしまっているが、以前は陽光を内部天井に反射させるライトシェルフ（吊り庇）が窓ごとに付いており、これがさらに細やかな陰影を落としていた。1階にあるデッサン用の石膏室では、大きなトップライトから注ぐ光が圧巻である。

そして、絵画棟の奥に視線を移すと、森の中からノコギリ屋根をもつ彫刻棟が顔を覗かせている。石や木などの重量物を運びやすくするために低層でつくられてた、驚くほど長いヴォリュームの建物だ。ここでは、低層であるため上部から制作に必要な拡散光を取り入れているのだが、このトップライトが特徴的なリズムをつくりだしている。

いずれにせよ、3棟ともギリギリの予算の中でデザインされたことが、結果としてこのような無駄のないモダニズム建築として表れることになったのである。細身の構造と内部への光の導き方のみで、繊細な陰影の襞をつくりだしているデザインに天野の力量を感じる。

小さな原生林へ

ここには、建築の枠を越えて人と自然が向き合い、気持ちに潤いを与えてくれる環境がある。天野の建築は、そのような役割を担っていることを教えてくれる。しかし近年、新しい建物がいくつか完成して、キャンパスの様相が変わってきている。天野が大切にした緑多き“空き地”や敷地の外へ繋がる隙間もキャンパスの狭さゆえに、新たな建築によって埋められて消えつつある。しかし“小さな原生林”はまだ健在だ。一度、上野の森の奥まで足を伸ばして天野が残した“小さな原生林”と、それを守るためにつくられた彼の建築を体験してみたいだろうか。

※ 1 『東京美術学校校友会月報』（第十三巻第五号 大正三年十月）『台東区史通史編Ⅲ上巻』より引用。

※ 2 ブリーズソレイユとは外ルーバーなど日除けが建築と一体化されたもの。

参考文献 『台東区史通史編Ⅲ上巻』（台東区史編纂専門委員会、東京都台東区）

『空間』1号【座談会】芸術教育とキャンパス（東京芸術大学美術学部建築科教室）

『有機的建築の発想—天野太郎の建築』（吉原正編 建築資料研究社）